様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　7　日現在

機関番号：32508
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21500971
研究課題名（和文）初等教育国語科における「みる」「みせる・つくる」領域育成向上教育プログラムの開発
研究課題名（英文）The development of domain training improvement educational program to build about Visual Literacy in Language Learning in elementary school education
研究代表者
中川　一史（NAKAGAWA　HITOSHI）
放送大学・ICT 活用・遠隔教育センター・教授
研究者番号：80322113

研究成果の概要（和文）：
(1)先進事例調査を通じて既存の方法論およびプログラムを批判的に乗り越える方法論を明らかにする。
(2) プログラム設計・開発・評価を通じて、本プログラムに求められる要件を明らかにする。
(3) 授業での活用を通じて、実証的にプログラムの有効性を明らかにする。必要に応じて改善を行う。

研究成果の概要（英文）：
(1) Identifying How to critically go beyond the existing methodologies and programs by studying the latest good practices
(2) Identifying what are required to this program through designing, developing and evaluating the program
(3) Identifying the validity of this program through its utilization in the lessons, improving this program when necessary

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 21 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
平成 22 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 23 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：科学教育・教育工学
キーワード：メディア教育 、初等教育、国語科、「見る」領域、「見せる・つくる」領域

１．研究開始当初の背景

2008.1.17 の中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会答申「情報教育についての答申」によると、「情報教育が目指している情報活用能力をはぐくむことは、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着とともに、発表、記録、要約、報告といった知識・技能を活用して行う言語活動の基盤となるものである。」としている。

2003 年 PISA 国際調査（OECD 生徒の学習到

達度調査）で、わが国の順位が下がったという結果を受け、近年、わが国では、「学力を高める」と「基礎基本の徹底」という課題が重視されている。「学力とは何か」ということについては、これまでにも論じられてきたが、暗記・計算のみで獲得されるものではなく、社会的文化的環境・他者との相互作用を通して育まれるものである（大田　1990）。わが国の子どもは、国際的にみて学ぶ意欲が低いという調査結果があるが、知識理解、スキルの獲得が目的となる学習に学ぶ意義や楽しさを見出せないことが理由のひとつとして考えられる。

こうした問題に対して、「学習者が、メディアで表現し、伝え合う活動」を教育に取り入れることは、学力を高めるための教育方法のひとつとして重要な役割を果たすと考える。目的意識をもって、何かを調べ、自分の中で再構成し、分かりやすく表現して伝えるプロセスを通じて、知識理解やスキル習得のための学習成果が活かされるし、他者と影響を与え合う実感によって学ぶ意義を感じることができるからである。

新学集指導要領国語科では、これまでの「連続型テキスト」中心の学習活動から、さらに「非連続型テキスト」を視野に入れた内容に踏み込んでいる記述が多く見られる。例えば、第三学年及び第四学年の「B　書くこと」では、「収集した資料を効果的に使い、説明する文章などを書くこと。」が求められている。そのため、教科書では、説明書作りや新聞の読み取りなど、資料と文章との行き来を意識させるような題材がさらに多く配置されることが推測できる。さらに、第五学年及び第六学年では、「A　話すこと・聞くこと」で「考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報を関係づけること」、「B　書くこと」で、「引用したり、図表やグラフなどを用いたりして自分の考えがわかるように書くこと。」「表現の効果などについて確かめたり工夫したりすること。」「書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。」など、情報活用能力を総合的に発揮しながら言葉の力をつけていく、一つの国語科の方向性がみてとれる。

現行の学習指導要領に準拠させた小学校国語科教科書でも、新聞作りやガイドブック・パンフレット制作、CM研究、ニュース番組作り、プレゼンテーションなど、多くの映像メディアに関する題材が盛り込まれている。これらの言語活動では、映像メディアと切り離せない学習活動になっている。メッセージを非連続型テキストで補完しながらその伝えたいことがらを確かなものにしている。

映像教育への先駆的な提起としては、例えば、滑川が読書を通して映像自体の国語科としての教材の可能性に言及している。その中で、メディアは言語表現の補助的扱いになっている。しかし、子どもたちをとりまく状況は当時とはかなり様変わりしてきている。ゲーム機を使って多くの子どもたちが日常的に遊び、携帯電話の所有率も上がってきている。メールやブログのトラブルの主役に小学生がなる事例も少なくない。子どもたちは生まれたときから映像やメディア機器に囲まれている。上記のような国語科教科書における学習内容も、このような社会状況と無関係とは言い切れない。

２．研究の目的

本研究は、３年間の期間の中で、次の点を明らかにするものである。

（1）先進事例調査を通じて既存の方法論およびプログラムを批判的に乗り越える方法論を明らかにする。

（2）プログラム設計・開発・評価を通じて、本プログラムに求められる要件を明らかにする。

（3）授業での活用を通じて、実証的にプログラムの有効性を明らかにする。必要に応じて改善を行う。

３．研究の方法

映像メディアをどのように国語科の言語活動に関連させて授業をデザインしていけばよいのかについて、学習指導要領や市町村の教育課程に明記されている例はあまりなく、とまどう初等教育の教師は少なくない。そこで本研究では、国語科においての映像メディアの理解や表現についての関係性、系統性を提起するための学習内容や到達点を整理・検討し、授業設計のための指針を提供する。

４．研究成果

22年度は、21年度からの継続課題として、「見ること」「見せること・つくること」領域の評価規準のカテゴリー化と到達項目の生成とカテゴリー間の分析を行った。また、新学習指導要領の小学校国語科三領域との関連について検討した。

下位項目や評価規準の内容も加味して、「見ること」「見せること・つくること」領域の到達項目を対応させた。これにより、内容の重点のちがいはあるものの、１項目をのぞいて対応させることができた。

23 年度は、22 年度に着手した「授業実施ガイドブック」「素材コンテンツ」の開発も行い、「見ること」「見せること・つくること」領域を中心とした四実践（新聞制作、ニュース番組制作、パンフレット制作、絵本を読み解く）について単元開発を行った。この実践

は、Web サイトにて広く公開している。これら実践について、22 年度までに生成した評価規準と到達項目に照らし合わせ、その妥当性も確認した。

本研究の課題として、「学習内容を実践するための研修の実施」がある。「見ること」「見せること・つくること」領域を意識していない多くの教師が、これらを意識して授業実践をデザインできるようになるには、その成果や着眼点・授業デザインの仕方などが理解できるような研修を実施することも重要な課題となる。そのためには、いわゆる講演を受講するような研修だけでは不十分だと考える。そこで、「見ること」「見せること・つくること」領域を国語科の授業場面において意識できる内容を核に実技体験や模擬授業（ワークショップ式）を含んだ研修を企画、実施する必要がある。その上で、どのような効果があったかを今後調査し、改善していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①川村康文,中川一史,中村保裕,三瓶敦司
現職教員からみた「理科デジタル教材」の利用に関する目的意識と活用場面ー「理科ねっとわーく」の授業実践場面からー
日本科学教育学会,科学教育研究, Vol.35 No.4, 319-329, 査読有,2011 年 12 月
②森本容介,中川一史,苑復傑
「大学教員のための授業改善ヒント集」の制作と運用
メディア教育研究,第 8 巻,第 1 号, Vol.8,No.1, R1～R6, 査読有,2011 年 12 月

〔学会発表〕（計７件）
①中川一史,中橋雄,佐藤幸江,森下純一,三浦千英
伝える活動を支えるソフトウェアと研修パッケージの開発
日本教育メディア学会研究会　2011 年 12 月 長崎
②山本朋弘,秋元大輔,村井万寿夫,藤本康雄,中川一史
児童生徒のコミュニケーション力育成の促進に関する教員向け意識調査の分析
日本教育メディア学会研究会 2011 年 12 月 長崎
③杉聖也,山本朋弘,中川一史
新聞見出しに着目した言語活動を取り入れた授業展開と評価
日本教育メディア学会
2011 年 11 月　東京
④稲垣忠,中川一史,村井万寿夫,清水雅之,中橋雄,内垣戸貴之,山本朋弘,栗原一貴,二木祥一
一人１台情報端末を活用した実践にみるデジタル教科書・教材の用件
日本教育メディア学会
2011 年 11 月　東京
⑤ Hitoshi NAKAGAWA,SUNG-HO KWON,Makiko KISHI,YukieSATO
A Comparative Study of Criteria on Visual Literacy in Language Learning, between Japan and Korea
ICoME2011（International Conference for Media in Education）
2011 年 8 月　Korea
⑥TADASHI INAGAKI, HITOSHI NAKAGAWA, MASUO MURAI,MASAYUKISHIMIZU, YU NAKAHASHI, TAKAYUKI UCHIGAITO, TOMOHIROYAMAMOTO, KAZUTAKA KURIHARA, SHOICHI FUTAKI
What Do Interactive Whiteboards and Tablet PCs Bring to a Classroom?
ED-MEDIA2011 World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia & Telecommunications
2011 年 6 月　Lisbon, Portugal
⑦ MASUO MURAI,HITOSHI NAKAGAWA,YUKI KOBAYASHI, KEISUKE IKAMI
Development of the Projector Attaching Interactive Unit
ED-MEDIA2011 World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia & Telecommunications
2011 年 6 月　Lisbon, Portugal
⑧佐藤幸江,中川一史,中橋　雄,石川　等,黒川弘一,森下耕治
昭和26年度版学習指導要領における小学校国語教科書についての映像メディアの理解と表現の指導に関する分析
日本教育メディア学会研究会論集第３２号,pp.1-4, 2012年２月
⑨佐藤幸江,中川一史,中橋　雄,石川　等,黒川弘一,森下耕治
昭和22年度版学習指導要領（試案）における小学校国語教科書についての映像メディアの理解と表現の指導に関する分析
日本教育メディア学会研究会論集,pp.27-30, 2011年12月
⑩中川一史,中橋雄,佐藤幸江,西田素子,前田康裕

小学校国語科における映像メディアの表現に関する到達項目の整理
日本教育メディア学会,第１8回日本教育メディア学会年次大会発表論文集,pp17-18, 2011年11月
⑪中橋雄,中川一史,佐藤幸江,前田康裕,山中昭岳,岩崎有朋,佐和伸明
メディアで表現する活動における到達目標の開発
日本教育メディア学会,第１8回日本教育メディア学会年次大会発表論文集,pp159-160, 2011年11月
⑫佐藤幸江,中川一史,中橋,石川等,黒川弘一,森下耕治
小学校国語科教科書における映像メディアの理解と表現の指導に関する分類方法の検討
日本教育メディア学会,第１8回日本教育メディア学会年次大会発表論文集,pp185-186, 2011年11月
⑬石川等,中川一史,中橋,佐藤幸江,黒川弘一,森下耕治
昭和35年度版賞学校国語科における説明文教材の映像メディア海苔会と表現に関する分析
日本教育メディア学会,第１8回日本教育メディア学会年次大会発表論文集,pp187-188, 2011年11月

６．研究組織
(1)研究代表者
中川　一史（NAKAGAWA　HITOSHI）
放送大学・ICT 活用・遠隔教育センター・教授
研究者番号：80322113
(2)研究分担者
中橋　雄　（NAKAHASHI　YU）
武蔵大学・社会学部・准教授
研究者番号：80389064
北川　達夫（KITAGAWA　TATSUO）
日本教育大学院大学・学校教育研究科・客員教授
研究者番号：70537399